

# 三商レポート

## 第42話 「母の口ぐせ」

(株) 三商 内藤 雄

(私事で恐縮ですが、) 明治40年12月生まれの母が100歳になり、国と都と市から表彰状が届いた。

昭和24年、母が40歳の時に父が亡くなった。末っ子の私は生後9ヶ月だった。これといった資産は何もなかった。物のない時代に女手ひとつで8人の子供たちを育ててくれた。生命保険の外交員(いわゆる保険のおばちゃん)の仕事をして77歳まで続けた。子供心に母の苦労を見てきた。苦労したご褒美の長寿なのだと思う。

認知症が少しずつ進んでいるが、ありがたいことにしっかりしている。それでも一人にはできない。70歳代・60歳代の兄や姉が交代で母が住むマンションに通っている。母はデイ・ケアやショート・ステイを楽しみにしている。

「きょうは何をしてきたの?」と聞いても覚えていないが。

私も時おり母のもとに顔を出す。「よく来てくれたなあ」と私に向かって手を合わせる。手を握って涙を流す。そして、「会社は大丈夫か?」「子供たちは元気か?」と聞く。何度も何度もくり返し聞く。「さっきも言ったでしょ」とは言えない。同じ返事を何度もくり返す。食事は作れないが、母がご飯をよそい、ポットからお茶もいれてくれる。そして「これも食べろ」「もっと食べろ」と。昔のままである。何歳になっても、母親がしみついている。

その母の口ぐせが、「みんなが良くしてくれるのでありがたい。どうかみんなに迷惑をかけずにコロッと逝きたいよ。」何度も聞かされるので参った。以前はその言葉を聞かされるのがつらかった。しかし、100歳が近づくにつれ「大丈夫、その通りになるよ。だからそれまでは元気でいようね。」と答え、髪が薄くなった母の頭を撫でる。

気丈だった頃の母の口ぐせは、「お父様が守ってくれている。うちには何にもないけど、子供達が多いのが財産だ。」わが子や孫に囲まれる認知症の母を見て、「その通りだな」と思える歳に私もなってきた。大切なのは物や金じゃないことを100歳の母が教えてくれている。(2007. 12. 5)